

する。近年、江藤淳の『成熟と喪失』（一九六七年）その他を承けつつ、サブカルや文学を素材にしながら、あちこちでブリリアントな八〇年代論を展開している大塚であるから、本書が先に触れた江藤・吉本の名高い対談の今日的な反復となつてゐるとさえいえる。

江藤淳がかつて吉本を愛していたのと

ほとんど似た仕方で、今や大塚が吉本を愛しているからこそ本書が成立したのである。その意味で、吉本は幸せなひとだといわねばならない。このような老後を得ることのできる批評家は、かつても今後も存在しないだろう。

それゆえ、本書の読みどころの一つには大塚の開陳する現代文化論・社会論があるわけだが、それが『成熟と喪失』を継承しつつ、吉本という存在を前にして語られなければならないというところに、大塚の歴史的・パースペクティブの焦点が隠されているように思える。その焦点とは、いうまでもなく「一九六八年の革命」にほかならない。

大塚が『彼女たち』の連合赤軍の著

者であることからもうかがえるように、大塚の歴史的視点の中心には六八年の世界革命（と、六八年の思想）があることではない。おそらく、大塚にとって日本における「六八年の思想」を準備したものとしては、江藤淳の『成熟と喪失』とともに、吉本隆明が踏まえられているのである。

確かに、一九七〇年の江藤・吉本対談の衝撃は、そこに日本における「六八年の思想」が表現されているかのように見えたところにあった。

しかし、吉本隆明は本当に「六八年の革命」と関係があつたのか。私見によれば、吉本の『共同幻想論』や『情況』と

学問として蓄積された視点で世界に繋がる

与那原 恵 ノンフィクションライター

『インド日記—牛とコンピュータの国から』 小熊英二

日本人はいつから自分たちを单一の民族として描きだしたのか。その「神話」を説き明かした『單一民族神話の起源』、

続いて出版された、沖縄、アイヌ、台湾、朝

いた当時の著作も——全くとは言わぬとしても——六八年問題とは関係がない。それは、「連合赤軍」以上にトンチンカンなものであつた。そして、関係がないことを知つたがゆえに、吉本は『マス・イメージ論』や『ハイ・イメージ論』といった方向への転回によつて、それを隠蔽しなければならなかつたのである。

本書対談の「名レフエリー」（大塚）の一人は、私の記憶に間違いがなければ、六八年革命当時の学生としてある決定的な——まさに、サブカル的ともいいくべき——アジビラを書いた人間のはずだが、彼はどのような心づもりで本書を企画したのだろうか。④

鮮などへの政策論から日本および日本人の概念を深く掘り下げた『日本人』の境界。私にとってこの二冊は衝撃的だった。

その内容の深さと検証の鋭さは言うに

及ばないが、もつとも感銘を受けたのは学者という存在の力にあつたと思う。とくに私に身近な沖縄については、これほど沖縄内部の論争がつぶさに再現された例を知らないし、それは沖縄を考えるとき、実に役立つ著作だったのだ。現在の沖縄をめぐる出口の見えないような論争に疲れるとき、この二冊の著作を広げることによつて救われたこともたびたびだ。

その著者的小熊英二氏がつぎに何を書くのか、多くの読者が待ち望んだところだろう。そして本書『インド日記』が出版された。インド、とは意外なテーマだ。近代日本におけるナショナリズムを問う著者が、なぜインドを描くのかわからな

いままに手にとつた。ところが、この行動的な学者の眼差しにかかると、インドをとおして近代『日本』が姿をあらわし、さらには『世界』にまで到達してしまうのだった。目の前にあるインドの光景を知性によつてあらゆる世界に繋げてしまう、この能力こそが学者の力だとあらためて思い知つた。

本書は国際交流基金のプロジェクトによってデリー大学で教鞭をとりながら印度の地方を歩き過ごした二ヵ月の日記である。インドなら私も何度か旅をしたことがあるので、わかるところもあるかと読みすすめていたのだが、ただポケットと旅しただけの私にはまつたく見えなかつたインドがそこにあつた。

たとえばインドの街にはどこにでも牛がゴロゴロしていて、私もそれが牛を大事にするインドらしい風景だと思つていた。ところが実は近代になって急速に都市化のために牛が街中をうろつくという現象になつたという。都市の牛は近代に出現した風景なのだ。

また、インドを語るときに欠かせない「カースト」制度さえもイギリス支配によつてそれまで無自覚な慣習だったものが「伝統」として創造されたものだといふ主張を紹介している。

インド的なものと思われている光景は近代になつて出現したもので、読者は勝手に思つていた「インド的」なるものに疑いを持つことになる。

著者は北西部のパキスタンとの国境の町で、インド・パキスタン双方の住民が互いに相手を「外国人」と見る光景につかる。もともとひとつの州であつたのに「イギリスが決めた国境」によつて分裂した「国」。宗教的な違いはあるもののもともと同じ地方の人々が国という境界によつて憎悪さえ持つてしまふ。この現象を南北朝鮮の関係の類似点として説明している。

さらに印パの対立によつて多くの難民が生まれ、デリーに移り住んだり、海外へ移民したひとも多いという。東京の印度料理の多くはパンジャブ系の北インド料理だと説明されれば、渋谷でインドカレーを食べたレストランのことを思い浮かべ、印パ問題は、私の身近にもあつたことを知る。

さらに著者はグローバリゼーションと経済自由化に揺れるインドのさまざま

インドが多民族国家であることはよく知られているが、近年ヒンドゥーナショナリズムが台頭しつつある。その背景は何か。

断面を浮き彫りにしている。

小熊氏は、そうした問題をあらゆる場でつかみとり、思考する。その歩き方がすごい。インドの知識人との対話やシンポジウムの場はもとより、高級住宅街で売られているスイグルミやシャンブレーの値段に驚き、観光地ベナレスの客引きの様子にその背後にある経済を読み取る。私が初めて旅したインドは南部ケララ

州だったのだが、豊かで英語を話すひとが多く教育水準も高いという漠然とした印象しか持たなかつた。ところが、同じ土地を訪れた著者は、英語を話すといふことははどういうことなのか、教育を受けた多くのひとたちの雇用の場が限られてゐる現実にまで目がいく。

「よせん私はこの国では、最終的に（略）社会の一員として固定されていないから

こそ、社会のなかを浮遊し、浸透していく力を持っているのかもしれない」と書いているが、それこそが世界に繋がる視点なのだろう。

本書のなかでとくに感動的なのは、インドのフェミニストたちの活動ぶりを紹介しているところだ。農村の女性たちのために、まさに役立つてゐる思想だと思えた。日本のフェミニズムの現在と比べて、考へることが多かった。

「学問として蓄積された視点」がインドを特異な文化の国として描くのではなく、読者を広い世界に導いている。「近代」や「歴史」に興味を持つひとすべてに読んでもらいたい一冊だ。④

エリア・スタディーズ 現代韓国を 知るための55章

石坂浩一、館野 哲編著 ◎1800円
政治・北朝鮮觀から食文化・映画まで一番新しい韓国ガイド。

エリア・スタディーズ 現代中国を 知るための55章

高井潔司編著 ◎1800円
大国中国の21世紀はどう展開するのか！ その現在と未来を読む。

エリア・スタディーズ オーストラリアを 知るための48章

越智道雄 ◎2000円
オーストラリアの知られざる側面をコンパクトに収録。

エリア・スタディーズ モンゴルを 知るための60章

金岡秀郎 ◎2000円
牧畜生活、人々の思考から現在に至る通史まで一冊に凝縮。

明石ライブラリー19 ホームレス／現代 社会／福祉国家

「生きていく場所」をめぐって
岩田正美 ◎3500円
ホームレスとして生きる人びとを通して福祉国家日本の現状を検証。

学校をジェンダー・ フリーに

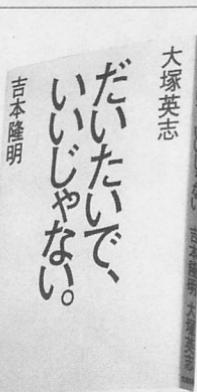
黒田温子、館かおる編著 ◎2800円
学校での性別役割分化を解明し、ジェンダー構造をなくす道を提示。

日本郵便発達史

付 東海道石部駅の郵便創業史料
藪内吉彦 ◎8000円
日本近代郵便の成り立ちを史料を総横に活用し論証した稀有な研究書。

明石書店

〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11
TEL03-5818-1171 FAX03-5818-1174
振替00100-7-24505 (価格は本体価格)



ミステリーの面白さを備えたストーリーテリング

小沼純一 作家

『シェイクスピアの謎を解く』 イアン・ウィルソン

シェイクスピアの作品はいつ読んでも観ても面白い。シェイクスピアはつねに「現在」でありつづけ、この劇作家の生涯が謎に包まれていようと、実際、普段はあまり気にしてはいない。「古典」として読み継がれる質をもつているがため、

てはくれない。いわば、シェイクスピアのメイキヤップの、そのドーランの匂いを嗅がせてくれない

。 ウィルソンはつづけて、シェイクスピアのエッセンスはその深い感情にこそあり、この感情の深さと広さがどこから発

作品として生まれた現場については大して知識がなくとも読めてしまうという逆説がここにある。

とはいえる作品の魅力に捉えられれば捉えられるほど、作者がどんな人物だったか知りたいという欲望が生じてくることも事実だろう。イアン・ウィルソンはまさにその欲望をこそ満足させようとする。「学究的なアプローチは、確かに賞賛すべきものにはちがいないけれども、惜しむらくは、一般読者がいちばん知りたいと思うことに答えてはくれない。シェイクスピアの与える、あの実感を味わわせ

しているのか、生涯の奥には一体何があつたのかを問い合わせ提示する。著者は当然、さまざまな資料を駆使しながら、「シェイクスピア」の実像を追うことになるはずだ。生まれ育ったストラトフォード、父親の職業と地位、財産、学校で受けた教育、早い結婚と年上のつれあいの妊娠、ロンドンへの出稼ぎなどなど。

事項の列挙は単純だが、思いがけない資料と資料をつきあわせ、浮かび上がつてくる事実——ウィルソンは慎重に仮定や推定を書き付けていく——いや大胆な仮説は、ほとんどシェイクスピアについて

の紋切り型や、また自分が知っているものやもやを、一陣の風のごとく晴らしてしまう。しかも論証というよりストーリーテリングと言つたほうが適切に思える文章の巧みさ。ひとつひとつの章がけつてしまくなく、しかも終わりのあたりは次の章へと読みすすめやすいように、誘うように仕組まれている。さすがにこのあたりは『トリノの聖骸布』『スーパーセルフ』といったベストセラーの書き手である。

エリザベス女王が厳しくカトリックを弾圧してプロテスタン政策を推し進め、王室や貴族のあいだでは本音を言わないことがまかりとおつていた時代。何度も疫病が流行した時代、ロンドンの街を歩き、ひとと交流し、作品を書き、演出するシェイクスピアの姿は、ウィルソンの記述で現実味をおびる。読み手はこの文章によつて、否応なしに想像力を刺激されてしまう。諸々の謎とは、現実の謎であるとともに、ひとの興味を、想像力を喚起する装置にほかならないかのようだ。何よりも魅力なのは、資料を前にした